円盤と宇宙哲学の研究誌

日本GAPニューズレター

第32号

昭和41年8月10日発行

日本GAPニューズレター

—1966—
第32号目次

リーラクセイシュンの効用（遺稿）……G・アダムスキー 1
人間は奉仕単位……アリス・K・ウェルズ 3
アダムスキーの体験は事実なり……ロウランド・クセラ 8
最近の情報……C・A・ハニー 12
1．心霊的コンタクトは誤り……12
2．月にはいま人間がいる！……13
3．円盤目撃はまだ発生する……15
円盤の推進方法……ジム・エンツミンガー 18
金星と土星のブラザーズの人間性……ロウランド・クセラ 20
生き生きしたヤングスター……T生 21
米国の円盤騒ぎ……22
1．人間二人が空から降下した？……22
2．他の惑星の人間は友好的だとヴェンチュラのウェイトレスは語る……23
3．6名の高校生、4個の気味悪い物体を目撃……23
4．ミシガン州の円盤事件……25
カポキンの円盤……チャールズ・ギブスミス 27
お知らせ……30
編集後記……32

リーラクセイシュンの効用（遺稿）

G・アダムスキー

精神と肉体の健康化を図るのに最も有効な方法の一つはリラックスする（心を弛緩させる）能力の発達にあります。心理学や医学ではこの方法によって得られる有効な結果を認めていますが、一般人はリーラクセイシュンを行なうのを困難事のように思っています。

リーラクセイシュンに関しては大きな誤解があるようです。一般にそれは不活動の状態だと考えられていて、多数の人が「自分は常に多忙だからリラックスする時間がない」と言ったりします。しかしリーラクセイシュンが真に理解されるならば、いわゆる休息時よりも仕事をしているときのほうがより大きなリーラクセイシュンになることがわかるでしょう。なぜなら宇宙の法則は目的のある行為を要求しており、また人間が自分の仕事に大きな関心を持つならば、行為を通じて現象化しようとしているエネルギーの自由な表現にたいして人間は径路になるからです。言いかえれば、何かの仕事に我を忘れている人は、宇宙の力にたいして自分の普通の肉体的抵抗を起こすことを忘れてしまい、意識という大きな力にたいして自動的に自分を解放するからです。

リーラクセイシュンによってこそ、エネルギーと英知とを溢れ出させている創造の大貯蔵庫にたいしてわれわれはドアーを開くのです。リーラクセイシュンは調和した無抵抗の行為の領域における再建の過程であって、大師の次の言葉を再現する真の方法です。

「わしの意志ではなくて父の意志が行なわれるのじゃ」

リーラクセイシュンは不活動ではありません！ きわめてもの静かな人がリラックスしているとは限りません。人は一種のコン睡状態に入ることもできてそれをリーラクセイシュンと解釈するかもしれませんが、かかる状態は、肉体細胞の振動を低下させて細胞を一時的なコン睡状態にするところの、平衡状態の喪失によって起こる結果にほかなりません。これは実は破壊的な状態ですから積極的に避ける必要があります。リーラクセイシュンとは心中に真空状態を生じることや行為の停止を意味するものではありません。それは肉体の意識が宇宙の大活動に自らを解放することなのであって、ゆえに肉体のどの部分にもコン睡の状態を起こすはずはないし、起こすこともできないのです。もし人が自分の肉体中で起こっているより精緻なより激しい活動に気付かないならば、本人は真のリーラクセイシュンに入ったのではなくて、単に無関心の状態になっているにすぎません。

人は自己催眠によって肉体を静めることはできますが、これはリーラクセイシュンではありません。というのはこれは肉体を構成する諸要素の自由な活動を破壊するからです。肉体は微小な細胞からできていて、各細胞の中には無限のエネルギーを持つ生気（スピック）がひそんでいます。この生気（スピック）すなわち核は肉体の刺激的な力ですが、この中心の力を取り巻く分子群が概して緊張の状態に保たれ

ているために内部の力の放出を阻止する障壁となっていて、そのため中心の力に左右されません。ところがこの緊張状態が解かれると、各細胞を構成している外側の分子が中心のエネルギーにたいして受容的となり、そのエネルギーの活動によって高振動化するのです。

リーラクセイシュンは細胞間の抵抗をなくすことによって肉体内部の摩擦を減少させます。例をあげますと、きわめて小さな鉢の中に多数の魚を入れてやりますと、互いに避け得られない接触のために絶えまのない摩擦が起こり、ウヨウヨした状態によって各魚の活動は不活発となります。しかしこの魚たちをもっと大きな鉢に入れてやりますと互いに衝突することもなく気ままに泳ぎまわります。この場合は魚たちが持っているエネルギーを放出するべき正しい状態に置かれたわけです。肉体の細胞もこれと同じです。そして細胞をより大きな自由な状態にするのは〝肉体の心〟です。

一般人は自分が如何に利己心によって完全に束縛されているかという事実に気付いていません。緊張というものは全く人間的状態です。所有欲、食欲、恐怖、野心などこれらすべてが肉体内に一種の強情な状態を作ります。きわめて所有欲の強い性格の人にとってはリーラクセイシュンは最大の難事です。というのはリーラクセイシュンは解放と非抵抗から成り立っているからです。それは生物の宇宙的な自然な状態であって、常に保たれねばならないものであり、利己的な欲望にふけっている人は達成できない〝状態〟です。

宇宙的な人間は平静さとリーラクセイシュンの状態のなかに生きています。そのような人は〝あなたのもの〟とか〝私のもの〟という区別を知らないからです。本人は完全に〝父〟によって導かれていて、そのあらゆる想念は純粋な状態にありながら自由に完全に遂行されます。人間があらゆる種類の苦痛、病気をひき起こすような緊張状態に入るのは、自由な生命活動にたいして抵抗を起こすときです。

リーラクセイシュンとは柔軟な受容的な状態で、それは意識という力の方へ人間を解放するものであって、人間はその力へ近づけばよいのです。生命とエネルギーは無限ですが、人間は自分が受け入れようとするだけの生命とエネルギーしか持っていません。人間がそれらを表わすことは可能ですけれども、そうしようと思えばそれらにたいして無抵抗にならねばなりません。人間は個人的なエゴを高めることによって真の行動の道を失っています。あらゆる現象は個人的なエゴの努力によってもたらされるのだと思う習慣を作り上げています。完全に展開させることができるはずの諸状態を無理やりに展開させようとして不必要に自分を疲れさせています。肉体に優越性をおいているために多くのエネルギーを労費しています。無抵抗の道とは力の道であり、おだやかさのなかにこそ摩擦のなかよりも激しい活動があるということを肉体の心が理解するのは困難です。人間は粗雑な振動の中で生きることが普通になっているために、より精緻な静かなおだやかな状態の中に存在する活力を自覚することができません。しかし無抵抗の受容的な態度のなかに生きる人は真の幸福の道を見出しています。本人は疲れや苦痛や失望を知らないからです。このような人の場合あらゆる活動は容易に遂行され、完全な結果をもたらすの

です。

何かの大仕事を達成するためには人間は歯を食いしばって奮闘努力しなければいけないとか、個人的に刻苦勉励しなければならないというような考え方は誤っています。輝かしい業績をあげる人は自己の行動のすべてを静かなおだやかな状態に保っている人であって、人間は力と英知の放出者ではなく、それらを現わすところの径路にすぎないということを知っている人です。その径路たる人間が力と英知の働きにたいして解放的であればあるほど、その働きも大きくなるのです。

人間の生活に大いなる知恵をもたらすのは、〝個人の意志の行使〟ではなくて、神の前に個人の意志を捨ててしまうことによります。われわれはただ〝自我〟という壁を取り除きさえすればよいのです。そうすれば愛と理解の大波が自分の中に流れ込むことになり、やがて平安な活気と静穏な力の中にひたるようになります。人間の最大の栄光はリーラクセイシュンによってもたらされます。というのはこれによってこそ人間は〝宇宙の意識〟という光輝あるものと一体化するからです。リーラクセイシュンは〝力〟に到達するための大通りです。解放こそ至福に至る道なのです。平安と力とは並行しなければなりません。そして人間が意識的な生長という建設的な前進を続けようとするならば、誠実さと行動とが一体化する必要があります。

人間は奉仕単位

アリスK・ウェルズ

二月六日に当地で行なわれた日曜日の会合は、悪天候にもかかわらず大成功でした。人々がアラシをついてやって来るとは思いませんでしたが、一同が驚いたことにはイス席は満員でした。新旧の会員はみな出席を楽しんでいるようでした。この一年前にジョージ・アダムスキーが最後の講演会をこのヴィスタで開いたからです。米国や各国のリーダーはブラザーズ（編注＝進化した惑星の友）の計画の遂行に立派な仕事をしています。また多くの人々が各自の分野で奉仕を続けています。以下は米国アダムスキー財団の幹部たちによる手記です。

「機械類の必要性」　ジム・エンツミンガー記

進化した惑星人は健康を維持するのに機械類や何かの装置を使用しているのかと多くの人が質問している。読者はアダムスキーの書いた論説によって、彼らは必ずしも機械装置は必要とせず、良き想念と友好的な愛の心を持ちさえすれば望ましい健康状態を保てるので、彼らブラザーズもそうしているのだと考えておられるだろう。これは或る面では真実であるが、地球人と同様に惑星

人といえどもときとして耐えがたいほどの状態が発生するのである。特に宇宙空間を旅する惑星人はこうした体験を経てきているのであって、その原因と結果とを研究し、肉体に起こる望ましくない結果を消滅させる装置を開発しているのである。あらゆる惑星に住む人間はわれわれの肉体を形成しているのと同じ化学物質から成り立っており、栄養上の必要物は全く同じであるということを知らねばならない。彼らは地球のわれわれよりもはるかに進化しており、トラブルの発生は少ないのであるが、やはりそれも起こるのだ。

われわれが人間を動かす動機というものをもっと深く探究して理解するならば機械装置は少なくなるだろう。われわれが分裂的な想念を起こすならば、肉体の化学物質の混乱を生じることになり、これは精神と肉体の両方に苦痛を増すこととなって、無限の連鎖反応をひき起こし、そのために何らかの治療を必要とすることになるのである。或る惑星では高周波の応用法が地球よりもよく理解されているが、地球でも脳細胞の働きを正常にもどす電気装置がある。

機械装置というものが人間の想念や幸福の実現に影響を及ぼし、同時に人間を動かす動機にたいする鋼鉄力を与える好例として、自然界と同様の新鮮な空気をもたらしてくれるイオン発生機の利用をあげてみよう。この装置は陰イオンまたは陽イオンを放つのである。一例を述べると、雷鳴がとどろく直前にわれわれが呼吸する空気は陰電荷の原子で満ちている。この原子は肺を通じてわれわれの体内に入り込み、血液中に混ざる。すると大抵の場合本人はなごやかなゆったりとした気分になるのである。一方、自然界または機械装置のいずれによるにせよ、陽電荷の原子を多量に供給するならば、人間はいらいらした気分や、憂ウツさ、疲れなどを感じるのである。人々のなかにはイオン発生機によって多大の影響を受ける者があり、そうした人たちは事務所や家庭に陰イオン発生機を設備している。これはいつか良き装置であることが認められようし、それとも始めに述べたように人間が進歩すれば不必要なものとなるかもしれない。

他の惑星の人々が用いている宇宙船は、推進力のみならず、船内において理想的な空気を供給し、宇宙空間の放射線を確実に制御できるように作られている。人々のなかには惑星人の宇宙船の酸素供給は地球の有人ロケットと同様にタンクを利用するのだと考えている人もあるが、これは誤りだ。というのは彼らの宇宙船は磁気的な吸引力によって宇宙空間に遍満する酸素を集めるように建造されているからである。これは彼らがきわめて短時間に宇宙空間を進行する莫大な距離を考えてみれば不可能なことではない。また彼らの食物は二酸化炭素を減少させるような種類のものである。

ゆえに彼らの宇宙船は或る場所から別な場所へ進行するのに何かの実体が船体を包んで移動させるような不可視の幽霊的物体ではないことがわかる。それは小さな惑星のように作られていて、われわれが住んでいる家屋と同じほどに現実の建造物であるということを惑星人は地球人に納得させようと果てしない試みを続けているように思われる。

惑星人が高速で宇宙空間を進行する能力や、大宇宙を形成している多くの波動をコントロールする能力などは不幸にして殆ど理

解されていない。われわれが一個の原子を肉眼で見ることができないからといってそれが存在しないということにはならない。原子が個体であることはだれも知っている。われわれに必要なのは巧みに機械装置類を作ってそれを立派に生かすようにするための知能である。」

アドリエンヌ・ムンクバーグ女史は多年ジョージ・アダムスキーの研究家でした。彼女はニューヨーク市に音楽研究所を持っていましたが、最近隠退して母国ノルウェイに帰りました。以下は彼女の手記です。

「ジョージ・アダムスキーにたいする私の個人的印象についてみなさんにお伝えするようにとの依頼を受けました。彼がニューヨークで講演を行なった際に会う機会を得ましたので、以下、私が受けた印象の分析について偽らざる記事を少し書いてみることにします。

ジョージ・アダムスキーは論争好きな人だといわれていました。しかし円盤研究にたずさわる人はみな多少とも論争好きなのではないでしょうか。私たちといえども他人の目にはそう映るでしょうし、自分の意見を強固に打ち出そうとする人は特にそうです。時の話題について各自がまちまちの意見を持つのは当然です。私にとってアダムスキーは全然論争好きな人ではありませんでした。彼の話を聞いているとたぶん彼の言っていることは正しいのだろうということがわかってくるのでした。実際、俗に直感力と呼ばれる自然の感知力が私の心中に起こり、子供の頃から心中に鎖でつながれて眠っていた或る想念を目覚めさせたのでした。動機というものが純粋で高遠であるならば、強い直感力は決して本人を迷わさないということが私にわかっています。

ジョージ・アダムスキーは私たちを目覚めさせた人です。彼は先駆者でした。彼の言葉の簡潔さは知恵と知識という富を覆い隠していましたが、その異常な確信力は或る的確な宇宙的知識に関する明快な概念を私に与えました。彼はダイナミックな力と高貴な素質を持つ人でした。彼は数百の聴衆の前で賛非両論の種々の質問に答えながら立っていました。しばしばきわめて不作法な態度で反発してくる人もいます。しかし彼のおだやかな平静な態度に変化はありません。いまにも暴徒化しそうな聴衆もいて、各ドアーのところには治安維持のために警官が待機している光景を見たことがありますが、アダムスキーの寛容と忍耐力までが破壊されることはありませんでした。なぜでしょう？　これは彼が聴衆を理解していたからです。私たちに述べられた彼の体験は一般人にとっては革命的なもので、数世紀のあいだ祖先から伝えられてきた伝統的な考え方のすべてを打破するものでした。このような挑戦に対抗できるほどに強い人がいるでしょうか。だれしも自己の考えを打破されて自己満足の場から振い落とされることを好みはしません。そもそも私自身がかつてはそうでした。しかしガが飛び出る前に先ずマユが二つに割れなければならないのと同様に物事が古い〝あなた〟を打ち砕く必要があるのです。

私たちはときとしてかつての姿とは異なる自分自身に直面しなければならないことがあり、それによって自己発見という大変革を体験します。これは時間という糸が複雑な模様を織りなして、

どこでそれを着たらよいかわからないからです。

ジョージ・アダムスキーは行動の人でした。彼は或る真実を語りましたが、それは私にとって道理にかなっていました。彼の誠実さはたいしたもので、罵詈雑言のあびせられるさなかにあっても誠実な態度に変わりはありませんでした。知識を他人に伝えようとして飽くことを知らない努力を続けているうちに、最大の屈辱的な体験に耐えなければなりませんでしたが、全然動揺はしませんでした。外界の騒ぎによってその落ち着いた態度が変化することもありません。そのユーモアを解する心は多くの曖昧な点を明らかにし、新しい考え方を起こさせます。聴衆に直面する際の彼の最も大きな特質の一つは言葉の平易さでしょう。少なくともニューヨークにおける公開講演で私が聴いたときは、難解な学問的な言葉は殆ど使用されませんでした。難解な言葉は何かの要点の意味を明らかにするどころか不明にすることがあります。私は聴衆の反応や意見を知るために参会者としばしば話し合いましたが、その結果わかったのは、心が成熟するとき関心の範囲がひろがり、人間の各段階は発達の一様相であって、そのために理性の秩序が保たれるのであるということです。各人は自分の心中において自分にとって正しい物事をわきまえています。賢明な人とは自分自身の分別や判断力を自分の案内人としてそれに従う人です。そうすれば本人は他人の言に惑わされることなしに〝わが道を行く〟ことができるからです。私たちは過去という結晶を打ち砕き、自分の考え方を現在という点にまで持ってきながら〝学び直さねばならないこと〟を知っています。このめまぐるしい時代に宇宙的な考え方が次第に発達し、宇宙的な生命にたいする自覚が私たちのなかに起こっています。人間の心は科学的知性を持つようになり、深い直感力を身につけるようになっています。少なくとも私の場合がそうです。現在想像もつかない未来の生活法の原型を形作るためには科学と哲学が密接な関係にあります。私たちは新しい科学の進展による宇宙の探険や新しい発見物に直面したときの人間の柔軟性に驚異の目を開いています。最も小さな砂の粒から人間に至るまで、しかも宇宙における一つの力としての人間の独特な能力に至るまで、あらゆる生きものの内部にひそむ美を知覚するようになっています。私たちはこれまで夢想もしなかった広大な可能性という海をのぞき見ています。そしてあらゆる生きものはダイナミックな変化の過程にあること、そして他の惑星の友の来訪は実際に宇宙的な計画の遂行であることを知っていますが、それを伝えてくれた人こそアダムスキーです。

以上が、わずかな言葉であらゆる既成概念を打ち破り、私たちに宇宙的な意義を持つ知識に目覚めさせたジョージ・アダムスキーにたいする私の印象です。その印象の中にあるさまざまな可能性を注意深く考えた上で、事実を空想から分離することによって、私は彼の講演や言葉からこの上ない喜びを感じています。またこの世で最も強い人とは、何らの賞賛をも求めることなくただ一人で立っている人であることを知りました。このような人こそジョージ・アダムスキーです」

次は一九六六年一月二十六日付で円盤研究家グレイ・バーカーに宛てた私の（アリスの）手紙のコピーです。

「バーカー様。あなたがジョージ・アダムスキーの伝記を書こ

うとしていることを知りました。如何なる権限でもってそのようなことをされるのですか。あなたは彼の生活上の事実を知ってはいないで、ただ意見を持っておられるにすぎません。

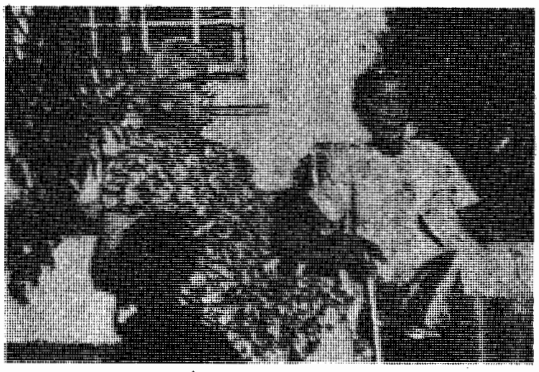
私は各国GAPからアダムスキーの伝記を書くように要請されました。彼との三十年にわたる交友のために私が最適任者であることを各リーダーは知っています。これは利益のために書かれるのではなく、生涯を人類のために捧げた人の真実の物語を真理の探究者に提供するために書かれるものです。

この世界を住みよい場所にしようと誠意をこめて努力したこの人の事績を食いものにするとは何事ですか。あなたが伝記の執筆の件を考慮されることを望みます」

さて多くの円盤事件や誇張された目撃報告類の多いこの頃、私たちはそれらに惑わされたり混乱したりしないように注意する必要があります。アダムスキーが伝えた知識によって裏付けられている私たちには、常識と論理的な推理力こそ多くの事件を判断する指針となります。また観察と警戒心も私たちのたゆまぬ生長にとって必要な要素です。

私たちは周囲の環境、世界、宇宙に存在する生命について学ぶためにこの世に生をうけています　人間は人類と創造主にたいする微小な一奉仕単位です。働くために必要なすべての道具に恵まれています。すなわち四つの感覚器官と意識的な英知です。人間が楽しむために特典として与えられている多くの有難い物を日々が認識させてくれます。

他人にたいしてより大いなる奉仕を行なうためには、人間個人が〝原因と結果〟の一単位であることを理解する必要があります。物事が発生する理由—なぜ物事が目に映る状態のままにそこに存在するのか—をよく考えて、自分の弱さを〝品性と理解力〟という強さに変えるよう努力しなければなりません。すると次第に生命の目的、他人にたいする寛容、宇宙の父にたいする謙虚さと信頼などが発達します。



アダムスキー財団理事長アリス・K・ウェルズ（右）と秘書のマーサ（左）　ヴィスタにて

アダムスキーの体験は事実なり

ロウランド・クセラ

ジョージ・アダムスキーが私たちすべてに残した仕事があまりにきびしいために、心から謙虚な気持で、しかも敬いの意味で皆様方にご挨拶申し上げます。皆様方にお話しようと長いあいだ望んでいましたため、私は少なくとも敬いの意味を見出しています。最近数ヵ月で私はあなた方と多数のすばらしい手紙の交換をいたしました。そして新しい友を得る栄に浴しました。しかし多くの場合私は朝のホンのわずかな時間に手紙を書いています。そんなわけで時間の欠乏のために思うように書けませんが、この種の手紙を自己の成長のための新しい接近手段とみなしています。ゆえに今後は毎月一度皆様に通信するつもりです。（編注＝この〝皆様〟というのは各国GAPのリーダーを意味する）こうして通信の度数を自動的に制限しようというわけですが、同時にこれを定期的なものにしようと思っています。

私は南ケアリフォルニアで生まれ育ち、当地で学校へ行き、インディアン大学を出ました。最初の専攻は社会学でしたが、その後再び大学を出て電子工学の分野で二度目の学士号を受けました。電子工学を修めるほうが経済的に有利だと思ったからです。これはあたりました。やがて妻のルーシーとのあいだに四人のすてきな男の子と三人のすばらしい女の子が授けられましたが、みな元気で健康です。それはともかくとして、電子工学の分野は魅力があって、しかも家族のよき支えになっています。しかし近年は本来の専門である社会学の読書ですごしました。

私は一九五二年にジョージ・アダムスキーに会いました。当時彼は円盤や母船のかなりな写真を撮っていました。二人の友情は急速に伸びて成長しました。これは彼が円盤について大ラッパを吹いていたからではなく、未来においてきわめて成功する要素をそなえた著者ジョージ・アダムスキーの輝きを放っていたからでもなく、彼から放たれる限りない温かさと誠実さから友情が芽生えたのです。このことはだれもが経験していると思います。数年間は他のだれよりも私はしばしばジョージに会いましたが、これは前述のとおりこの世に大型家族を持ったために起こる経済的な問題について助言を受けるためでした。しかし一方ではジョージと二人で実験をしたり、エネルギー・マシンを計画したり、星や野球などについて語り合ったり、生活を共にしたりして多くの楽しい年月をすごしました。以上がアダムスキーと私との交友です。

アダムスキーとコズミック・ブラザーズ（他の惑星の兄弟）とのコンタクト（接触）はたしかにあらゆる点で広大で深遠です。彼のコンタクトは他のコンタクト事件にくらべて或る程度の深さ、広さと一貫性を有する唯一の記録されたコンタクトです。アダムスキーのコンタクトは他のコンタクティー（惑星人に会ったと称する人）のそれよりもブラザーズの生き方のあらゆる面に関してより多くの知識を与えてくれました。ブラザーズの好み、人間性、関心事、機械設備、輸送機関、通信手段等はすべて示されて、完全な事実として説明されています。空想を排除し、正しくない、統一性のない中途半端な物語を含んでいません。こうしてブラザ

ーズと共に芽生えたジョージ・アダムスキーの意識のタネは、地球の兄弟たちと共にゆっくりとしかも着実に根を張りつつあります。たしかに私たちの〝意識〟という土はコズミック・ブラザーズのそれの肥沃さとは比較になりませんし、今日でさえもこの地球はアダムスキーのような感化力を持つ人からイスカリオテのユダを生み出す可能性はあります。しかしタネや土が悪いのではありません。私たちが挫折し、短気になり、絶望したりするのは時間の感覚の中においてのみそうなるのです。しかしアダムスキーが伝えたように、コズミック・ブラザーズは時間に束縛されません。ゆえにブラザーズはこの地球が遂げている真の発達を確実に直視しています。注意して見るならば、ブラザーズが完全な忍耐力と理解力とでもって地球人を扱っていることがわかります。ですから私たちもアダムスキーが示してくれた限りない忍耐力と理解力を常に思い出そうではありませんか。

今年の二月以来毎月一度アダムスキー財団で講演をさせていただくことは、まことにすばらしい特権でした。これまでの講演の題目は〝円盤を地上へ降ろそう〟〝ブラザーズから示された友愛精神〟〝ブラザーズの三月訪問（編注＝三月の円盤騒動を意味する）の報告と分析〟〝ブラザーズと比較した地球の科学の分析〟〝ブラザーズの人間性の分析と理解のための試み〟です。この最後の講演は数章に分けましたが、最初の章の一部はアリスによって伝えられるはずです。（編注＝別掲記事参照）六月の会合における講演は科学的な内容のものになります。これは毎月の講演を科学的なものと哲学的なものとに分けて交互に行なうことにしているからです。しかしこの種の研究活動においては哲学と科学とを完全に分離するのは不可能です。

ジョージ・アダムスキー財団の円盤スライド第一号が一部のリーダーたちに送られました。第二号以下は続いて出る予定です。これはかなりの労力と費用を要しました。いずれはすべてのリーダーにこれを送るつもりです。このスライドは三十六コマから成るもので、このうち六コマはアダムスキー撮影になる一連のすばらしい母船の写真で、スクリーンに映写すればすごい迫力があります。あとの写真はアダムスキーの先駆的仕事を裏付ける多数の円盤写真です。当分の間このスライドは一般に入手できません。有力なリーダーだけに送ります。スライドや例の記録映画はこんなふうにして最上に目的を果たします。またこれらの写真は貸出しをいたしません。スライド第二号は目下編集中で、第一号に劣らぬほどすばらしいものです。

次にきわめて興味あることは、アリス・ウェルズの執筆によるジョージ・アダムスキーの伝記と、私の執筆になる〝円盤を地上へ降ろそう〟と題する書物の発行が推進されているということです。これに時間を必要としたためにリーダーからの手紙に返事が遅れたわけです。しかしこの二著書はアダムスキーの物語を大衆に知らせるのにきわめて役立つでしょう。これは今年中に完了するようにあらゆる努力が払われています。

三月三十日の午後九時三十分頃、私と妻と二人の娘とは、ニューポートとバルボア海岸地区の上空を飛ぶＵＦＯを目撃しました。しかし興味ある点は、翌日のラジオで、二十五マイル北方のアズサ市では午前九時から十一時まで全市の四分の一以上が停電になったと放送したことです。これまでに右の事件の真相を示す多く

の証拠が存在しましたが、今後のブラザーズの活動によって起こるこの種の事件を注意するのは興味あることです。

アダムスキー財団のリーダー間で非公式な友好的な〝討論〟を行なうのは、最少限の努力で私たち相互のゴールのいくつかを達成する手段となります。（編注＝以上はクセラ氏の六月情報から）

＊　＊

私の六月情報にたいしてきわめて温かい回答を寄せられた方々に厚くお礼を申し上げます。また皆様の各種の提案を有難く思っています。この情報レターを開始したとき、リーダーのなかには印刷機を持たない方があるかもしれないことに気付きました。そのために重荷になると思います。また、なかには講演旅行や機関誌の発行などで多忙な方もあるでしょう。したがってすべてのリーダーからの回答を期待してはいませんでした。しかしこの情報レターが有用であるならば今後も送り続けます。

先回も申しましたように、この種の通信の目的は、アダムスキー財団を組織する意味でなく、直接通信の機会を提供する意味で、全リーダーを統一することにあります。科学または哲学上のニュースばかりでなく、私たち自身の人格、個性を含む個人的な書簡という手段による直接通信です。エゴと個性とのあいだには相違があることを銘記して下さい。自分自身を表現することによって、個人の人格は社会的なエゴの束縛から真の個体の自由へと成長できます。私たちはアダムスキーが偉大な真実を述べ伝えるのに成功したことを知っています。しかし最も重要なのは、彼のきわめて純粋な温かい個性のために成功したという点です。ゆえに個人的な情報レターが何らかの役に立つならば、これを続けることにしましょう。私はブラジルのビューラー博士が〝情報レター〟と名付けて下さったことに感謝します。（編注＝ビューラー博士はリオデジャネイロで活躍するアダムスキー派の著名な円盤研究家）

さて最初の情報レターを出して以来まだ一ヵ月にしかなりませんが、ケアリフォルニアでは多くの物事がありました。私たちは先月中、大体に週一回の割合で自宅においてUFOの遠隔目撃を体験しています。一度はかなり接近してきましたが、あまり速くて細部を見ることは不可能でした。

妻のルーシー（編注＝名高いルーシー・マクギニスとは違う）と私はフランク・ストレインジズ博士による円盤の講演と映画の会に出席しました。彼の円盤映画はアダムスキー撮影の円盤映画とは比較にならないつまらないもので、その中の最上の場面は数年前に撮影されたダニエル・フライのものでした。（編注＝フライは有名な円盤研究家で、かつて〝ホワイトサンズ事件〟と題する体験記により世に名を出した人）。この映画からインタヴューの場面を除いて円盤の場面だけにすれば全巻七十分のものがせいぜい七分ばかりとなります。しかし私のみるところではス博士はすぐれたメッセージを伝えました。彼は聴衆を納得させることを主目的としていて、立派な仕事をやったと思います。続いて彼は円盤フィルムに関する質疑応答を行ない、豊富な説明とインタヴューをやりましたが、これは聴衆を再び納得させることになりました。私の考えでは、わずかな資料にもかかわらずス博士は確実に聴衆の心に確信の念を植え付けたようです。ス博士は聴衆にたいして、真相をただすために国会議員へ手紙を出すようにとすすめ

ていましたが、すでに円盤を認めている人は必ずしもそうする必要はないと注意深くつけ加えました。また円盤を嘲笑し続けている人には、国会で立法化すれば政府にたいして不平を鳴らすタネを与えるだけだろうと言っていました。真実を知るのは全く個人的な体験によるのであって、教会、グループ、党派、政府、予言者が一般人にかわってやってくれるのではありません。要は個人次第です。

私はMIND（新次元の精神研究会）のウェズリー・ペイトマンに意見の交換を申し込んだ手紙を出しました。この団体は円盤目撃と地震の研究をやっている新しい円盤研究グループです。以前私は、推進力や資料を持たないために多くの円盤研究グループが起こっては消えてゆく実状を述べましたが、MINDの場合は資料を持っていると思います。私は更にペイトマンにたいし、キリスト教統一について功労あるものが存在するとしたら、それは円盤研究界とコズミック・ブラザーズの活動であると述べました。またアダムスキーが法王ヨハネ二十三世に「ブラザーと呼んでよいでしょうか」と尋ねることによって如何に偉大な先例を確立したかも説明しました。「私こそあなたをブラザーと呼びたい」というのが法王の答えでした。このキリスト教統一のタネと、アダムスキーが使者となったブラザーズから法王への書簡はたしかに芽生えてきて世界中に栄えようとしています。なお私は尊敬すべき団体MINDを別段支持するわけではなく、ただ意見の交換と相互の研究の促進を願っているだけだとつけ加えておきました。

MINDの機関誌〝ザ・プリズム〟の第一号中の声明で、彼らの努力が真剣なものであることを示す次のような記事があります。

「自分自身で全く独自に考える人は主観的でも客観的でもなく、この両者が見事に融合したものである。真実は一般人を圧倒するために応用されることがある。これはしばらくのあいだ人の心を閉ざす。なぜなら一般人は多くの分析すべき事柄を持ちたがらないので重要な糸口が見失われるからである。これは公明正大さを望まず、真実を拒絶することによって混乱を起こすことを望む人の用いる手である。真実―真の真実はアーノルド以後の円盤研究界の先駆者たちに与えられた。（編注＝ケネス・アーノルドは戦後初めて円盤目撃を発表した人で、それ以来フライング・ソーサー―空飛ぶ台皿―なる呼称が生まれた）この勇敢な人々は大衆の所へ帰ってきて、信じて耳を傾けようとした人々すべてに語った。全力をつくして活動した。この勇気ある人々の多くは大衆の関心と好奇心を充分に換起してより深い探究へと駆り立てた。ブラザーズがそのメッセージを元の形のままで地球人に伝えることの不可能に気付き始めたとき、或る場合にはコンタクトを中止した。またコンタクトした人々のなかには完全に沈黙した人もあった。しかし真のコンタクティーは座り直してニセ者が滅びるのを待ったのである」

元ラジオアナウンサーで古くからの円盤研究家であり、NICAP（米空中現象調査委員会）のメンバーであるフランク・エドワーズは〝危険、空飛ぶ円盤〟という新著を出しました。警告のメッセージのほかに彼は新型の円盤が空中に見られることを述べています。この書はかなりの写真を掲げていますが、彼にインタヴューしたテレビ番組は著書そのものにあまり言及していません。

古代の歴史や予言類に関心のある人のために次のニュースをお

伝えしましょう。昨夜のテレビでルイス・ロウマックス（編注＝著名なテレビ司会者）は或る技師と対談しました。この技師はエジプトの大ピラミッドについてきわめて子細な研究をやった人です。この人の話の中に次のような予言がありました。(1)一九一四年から一九六六年までは諸国家の分裂時代。(2)一九六七年から一九七九年まではキリストの例にならう時代。(3)一九七九年は至福一千年（黄金時代）の始まり。これは、一九六二年にエジプトで生まれた新しい偉大な指導者が一九八〇年から人々の指導を始めるという米国のジョン・ディクスンの予言と大体に一致します。しかし私が確信するのは、私たちに必要なレッスンのすべてはすでに与えられてきたということです。私たちはただ理解してそれを応用すればよいのです。たしかに私たちは常に新しい例を応用できますが、多くの人は個人的な重荷を運ぶのに予言者を〝利用する〟だけで、兄弟の重荷を軽くするのに予言者の体験例を応用しません。

南ケアリフォルニアでは春と夏が美しく、花々はかつてないほどに美しく咲き乱れ、果樹は多種類の果実で満ちています。私の家には三分の一エイカーの庭があり、庭いじりが一家の趣味の一つです。自然界のこの美しさは限りない神秘を秘めています。

（以上は七月情報から）

最近の情報

C A・ハニー

1. 心霊的コンタクトは誤り

最近私はMIND（新次元の精神研究会）と称する団体から出された刊行物を受け取りましたが、それには、彼らが知る限りでは、円盤の乗員と地球人とのあいだにフィジクル・コンタクト（直接の対面）は行なわれたことはないという意味の記事がありました。そこで私は次の諸点を記した手紙を送りました。

(1)フィジクル・コンタクトは実際に発生したことがある。(2)惑星人は絶対に恍惚状態（トランス）、催眠状態などによる手段でコンタクトしない。(3)大衆にこのような考え方をまき散らす人は知ってか知らぬかインチキを行なっている。(4)その動機は金もうけか売名である。かかる心霊団体のリーダーは心霊的手段で惑星人からメッセージを感受した（と思い込んでいる）理由について無知であるとはいえ、その行為がまじめな場合もある。

以上が手紙の大要です。心霊派の人でまじめな人を私は知っていますが、本人の考えが誤っている証拠を私は持っています。しかし金もうけを企んで純真な人をだましている人や、偽善者、売名屋などは問題になりません。

UFO心霊派におけるインチキを指摘するのにこれまで私はその方法をあげるだけで本人の氏名は公表しませんでした。

しかしここでは名をあげることにします。一九六六年三月十一日に私はハリウッドに住むMIND会員のジョー・ネル・ペイトマンという人から怒った手紙を受け取りました。MINDなる団体に誤った情報をだれが与えたかは私にわからなかったのですが、彼女にはわかっていました。それは夫君のウェズリー・ペイトマンです。

彼女からの手紙は次のとおりです。「私の夫が或る感応法によって予言していることは間違いありませんし、それが金を作るためであることも事実です。ところが、あなたは手紙や著書や刊行物の中味からみて夫の言動を判断する資格はありません。

人が攻撃する前で犠牲者が教える事柄を知るのはあなたにとって得策でしょう。さもなければ攻撃者に一人角力をとらせることになります。あなたの場合、あなたの側の資料を知り、それを理解することによって—それゆえに私の意見が事実に基づいていることになるのですが—あなたがアダムスキー氏の名声に便乗することによって栄光を得ようとしていると判断できます。それはアダムスキー氏を支持したということにもなるでしょうが、あなたの思慮のなさを暴露することにもなります。あなたの推理によれば私の夫はペテン師でウソつきで、ドロボーだということになります。私の忠告は次のとおりです。他人の資料を自分自身でよく理解するまでは他人を非難してはいけないと。

私は個人的なコンタクトの例を知っています。この関係者たちは一定期間以上地球の振動の中に、すなわち肉体の中にとどまることはできないことになっています。あなたはもう一度アダムスキー氏の資料を検討するとよいでしょう。あなたが愚劣な態度を改めるまではあなたの声明を取り上げることはできません。

ジョー・ネル・ペイトマン」

なぜペイトマン夫人は私が彼女の夫をペテン師だと言ったと思ったのでしょう？　夫がやっている事に罪悪感を持っていないのなら、そう思う必要はなさそうなものですが—。（編注＝右のペイトマン夫人の手紙の原文（英文）は誤字だらけで文法の誤りも目立つが、ハニー氏により〝原文のまま〟という注が付してある）

2. 月にはいま人間がいる！

月面に多くの不思議な現象が観測されてきましたが、大抵の場合それらは公式に取り上げられていません。通常かかる報告はもし米国で行なわれたものでなければ無視されるのが普通です（編注＝この記事は米国人を対象に書かれたものであることに注意）海外の報告類の殆どは信用度が低いというのは奇妙な事実の一つです。

一七八八年九月二十六日に天文学者のシュレーターが月を観測中、一個の輝く物を見ました。プラトー孔の南西側に沿ったアルプス山脈の峰々のあいだに星のような白光を放っているのです。十五分間見えた後に消えました。

この報告の後シュレーターと多数の学者が観測を続けたがダメで、もう光体は見えませんでした。一八六五年一月一日、別な有名な天文学者のグロウヴァーが同じ場所に光体を認め、これは三十分間続きました。この二つの目撃は現在までだれからも全然説明がなされていません。

一九二二年十一月二十八日に英国の大天文学者故H・P・ウィルキンズ博士は、月の孤立した山ライナを観測中、その山が異常にとがった影を投げているのを見ました。そのときの異常な出来事は、その長い影を横切っている一本の白いスジの存在でした。これは約二十分続いたが、両方とも消滅しました。以来この報告も全然取り上げられてはいません。

米国の天文学者W・H・ハース教授はティコ孔の外部東壁上に、不思議な白い発光体を観測しましたが、これは一九四〇年七月十四日のことです。一九四〇年には米国の別な天文学者パークロフトによって〝アラシの海〟の中のリヒテンベルク孔のまわりに赤茶色の地帯が発見されましたが、これと同じものはもっと早くマドラーによって報告されています。

一九四一年七月十日にハースはガセンディー孔を観測していました。突然一個の小さな光体がガセンディー付近の地域を移動するのです。これはほんのちょっとのあいだの現象でしたが、きわめて明瞭でした。知的生物がその光体を動かしたという推測以外の唯一の説明は、月の大気中で燃えた流星ではなかったかということです。

一九三九年三月二十九日にコペルニクス孔の内側全体は暗黒でした。太陽の最初の光が中心部付近の峰々に落ち込むまでにはまだ少なくとも四時間あります。すると突然一つの光が孔の中心部に出現しました。これは十五分続き、それから四時間後に太陽の最初の光が峰々の頂上を照らしました。しかし太陽がまだ照らさないのに峰々の頂上ばかりでなく山並のすべてが一時に内部からの光で照らし出されたのです。この光はどこから来たものか、これまた説明が与えられていません。

これまでに何度も孔の内部に光が観測されたのですが、その原因については全く不明となっています。或る場合には孔の内部全体が明るく照らされたこともあり、たとえばアリスタルクス孔などがそうです。

H・P・ウィルキンズ博士だけでも百個以上の白く円いドーム状の物体を発見しており、これには〝山高帽〟というニックネームがつけられています。これは人間を保護するために作られた或る種の〝小屋〟ではなかったでしょうか。

一九五三年七月二十九日に、ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙の科学部長であった故ジョン・J・オニールは四インチの屈折望遠鏡で月を観測していました。このとき〝危機の海〟にあるラヴィニウムとオリヴィウム岬間の五千フィートの深さの湾を横切って伸びている巨大な〝橋〟を発見したのです。当然世界の天文学者は彼に高らかな〝バカ笑い〟を与え、メンゼル流に彼の報告を嘲笑しました。（編注＝ハーヴァード大学のメンゼル博士は円盤否定論者として第一人者）

ところがそれから一ヵ月後の八月二十六日にその〝橋〟が月の大権威者であるH・P・ウィルキンズ博士によって目撃され、更に約一ヵ月後に今度は別な大天文学者パトリック・ムーアによって再確認されて、世界の天文学者は沈黙しました。それが存在したということについて疑問の余地はありません。ただ疑問としては「それは何であったか？」です。如何にも人工の建造物のように見えたからです。人工の物ならば、一体、だれが、何のために作ったのでしょう？（編注＝これについてはかつてアダムスキー

が「惑星人の、故障した大母船であったのかもしれない」と説明したことがある。その後まもなく〝オコール橋〟は消えた）

私はジョージ・アダムスキー氏が月面上で撮影した写真（複数）を見たことがあります。私の知る限り彼はこの写真を絶対に公表していません。彼の言葉を信ずるならば月にはすでに人間が住んでいることになります。その写真がそのことを示しているからです。

3. 円盤目撃はまだ発生する

数ヵ月前に（今年の始め頃）私は「円盤のパイロットたちによって各国政府への働きかけがますます増大するだろう。それは円盤目撃、着陸というかたちで行なわれるだろう」と述べました。またそれは一九六六年の始め頃だろうと言明しましたが、世界中の新聞が目下このことを立証しています。予告どおりに発生したからです。

右の時期における円盤出現騒動が大きなものだったと思うのなら、あなたはまだ何も見たことにはなりません。目撃事件の発生は続きますが、最大の円盤騒ぎは一九六六年の夏（七月、八月、九月）中に起こります。特に七月と八月に注意して下さい。また他の奇妙な出来事も今年の後半に起こります。地震、異常天候などが頻発するでしょう。私は一般に公表する情報以上に詳細な円盤情報を入手しています。（編注＝ハニー氏はこのあと米空軍の円盤否定論者たち、特にハイネックらにたいして激烈な調子で、しかも論理的な見事な文章で挑戦しているが、紙面の都合により省略）

4. 米空軍の態度は変わってきた

信頼し得るUFO報告が公表されるたびに米空軍から出される無意味な見解発表もどうやら終りに近づいてきたようです。態度は変わってきました。これまで一般大衆や新聞などは米空軍の円盤にたいする公式見解なるものが全く無意味であったことを知っています。次に掲げるのは一九五八年一月六日発行の〝ライフ〟誌十六ページに掲載された円盤問題に関するジャーナリズムの典形的な論説です。

「次の年にはざっと二百件の確実な円盤目撃例が報告されるだろう。それについて国防省は二百十件の反証をあげるだろう」

右は古い声明ですが、一九六五年と六六年には米国中の新聞雑誌にこれと似たような論説が載りました。

現在のジャーナリズムの態度は、ケアリフォルニア州アラメダの〝タイムズ・スター〟紙一九六五年八月十日付に掲載された次の社説に表明されていると思います。

「空軍のスポークスマンによれば、警官、保安官、空軍の係官その他の人々は一種のアノミアにかかっているという（編注＝アノミアとは物体の名称を正式に言う能力を喪失する症状）。これは空中に見られる観測気球、惑星、スイ星等のごくありふれた物を彼らが確認しそこなうことによって証明できる。彼らはこうした物をはっきりと見たのだが、それをUFOと名付ける—もっと一般には空飛ぶ円盤と呼ばれる—ことによって誤りをおかしたのだという。

しかしヨーロッパの自由世界から送られる無数のUFO報告は

誤りだということを空軍のスポークスマンはどのようにして語ることができるのだろう。特に円盤報告が入ってから二十四時間以内にそれを『最もすさまじいカミナリの例の一つである』と片付けることが一体どうしてできるのだろう。空軍のスポークスマンが正しかったとすればそれは可能だろう

しかし今や明らかなのは、円盤問題の知識のある無数の人々が長いあいだ空軍を疑ってきたがゆえに、空軍のスポークスマンは誤っていたということである。UPIが伝えたミシガン州ホートンの或る事件によれば、クウィーノー半島にある空軍レーダー基地の係員は次のように報告した。『スペリアー湖の上空を七機ないし十機のUFOがV字型編隊で飛ぶのをレーダーで確実にキャッチした』この編隊は五千二百ないし一万七千フィートの高度を時速九千マイルで南西から北北東に向かって進んだという。この事件が他の空軍関係のUFO事件と異なるのは『この物体群はカモ、スイ星、気球、その他これに類する物と確認された』という説明が付けてなかっったということである。

なぜ付けてなかったか？ この最大の理由らしきものは、見たところ不可能な物事を『ありふれている』と一言で片付けることを仕事にしている空軍のスポークスマンが、UFOが破壊活動を始めたか、またはUFOの優勢さが空軍の言明をバカげたものにしているというのか、このいずれかの結果になるようにUFO側の試錬も受けていたということである。

右の二つのうちでは後者が充分に考えられる。大衆を混乱から守るという空軍の弁解はそういつまでも支持されない。特に大混乱の原因が、しきりに飛びまわる奇妙な物体の群れにあるとする場合、なおさらである。多数の人々はそれを見ることができるからだ。大衆を混乱から守るといったところで、どうせたいしたことはない。大衆はせいぜい数時間騒ぐだけだ。人々は他の惑星から来た円盤の大群をしばらくながめているだけで、やがて飽いて、さて何かしようかなと座り込むだけだ。

しかし空軍のスポークスマンが次第に沈黙しつつある理由が何であろうとも、円盤問題についてよく知っている大衆に政府が真相を打ち明けるにはすでに時期が遅いのである。

地球だけが生命を持つ唯一の天体でないことは科学界で一般に認められていて、地球人も大気圏外へ進出しつつあるのだから、他の惑星の人間もすでにそれをやっていると考えるのは少しもおかしいことではない。

言いかえれば、UFOは太陽系の諸惑星から—または別な太陽系から来る宇宙船であるということを知って驚く者はいないのである。実際『そんな物ではない』と断言するほうが驚くべきことである。ゆえにUFO問題について公益の一助となる唯一の方法は、一日も早く政府が円盤問題の真相を公表することである」

以上の社説は、政府が大衆をごまかしているUFO問題にたいする辛辣な批評を述べた多数の社説のなかの一つにすぎません。前にも述べたように形勢は変わってきています。今は米国民の約七〇パセントがUFOは実在すること、大気圏外から人間が地球へ来る可能性があること、地球人が他の惑星に到着したとき地球人と同様の人間を発見するかもしれないことなどを考えています。

一体政府はUFO問題について何を知っているのでしょう？ それについて考えられるのは次の事柄です。

『(1)生命を維持することのできる近隣の惑星群から人間が地球へ来つつある。

(2)他の惑星の人間は地球の衛星である月に基地を持っていて、長期間地球を観察してきた。

(3)この人間たちはあらゆる点で地球人によく似ているが、体は小さいのから巨大なのまでいろいろある』

火星、金星、土星などから来た数千の人間が現在普通の地球人の姿をして地球上に住んでいます。彼らは家庭、仕事、家族、社会保障ナンバーなどを持っており、なかには政府の〝秘密出国認可書〟を持っているのさえいます。また彼らの多くは宇宙技術関係で働いています。

現在、各国政府は大衆に円盤問題の真相を公表するように惑星人からそれとなく仕向けられています。しかし利己的、経済的、政治的その他の理由で、殆どの政府はそれに抵抗しています。

次第に増加する円盤目撃や着陸事件などのかたちで行なわれる惑星人側のデモは今年中に更に激しくなり、特にこの七月と八月がその頂点に達する見込みですが、おそらく一九六六年の殆どに及ぶはずです。

一方、精神的、心霊的に惑星人とコンタクトしたと称する人々は、人間の心の性質に関する理解力の不足によって〝コンタクトしたと思い込んでいる〟にすぎないことが次第に明らかになるでしょう。と同時に一般人も他の惑星の人間は地球人と同じように肉体を持つ現実の生きた人間でなければならないことを認識し始めています。

また聖書に出てくるいわゆる〝天使の訪問〟とは、実は〝火の戦車(宇宙船)〟に乗って他の惑星からやって来て、地球の予言者たちと会話を交した人々であることも知られています。

ノルウェイの参謀本部々長ゲルノー・ダルンビル大佐は一九五五年に次のように報告しています。

「(編注=これは円盤墜落事件に言及したもの)スピッツバーゲンにおける例の円盤墜落事件はきわめて重大なものであった。われわれの現在の科学知識ではこのナゾを解明できないけれども、スピッツバーゲンでの円盤の残骸は実に重大な要素を含んでいるものと確信する。先般『この円盤はおそらくソ連のものであろう』という声明によって誤解が生じたが、われわれが強調したいのはこれは地球上の如何なる国の製品でもないということである。円盤の建造に使用された材料は調査にあたったあらゆる専門家にとって完全に未知のものである」(シュトゥットガルター・ターゲブラット紙、一九五五年九月四日付より)

〝ソ連製〟説が米国々防省のスポークスマンによってとなえられたところに興味深いものがあります。事実を少しも知らないでかかる声明が行なわれたからです。右の事件やその他のUFO事件に関して詳細を知りたい方はフランク・エドワーズ著〝空飛ぶ円盤—重大問題〟をお読みになるとよいでしょう。これは円盤書のなかでも最も重要なものの一つです。(編注=邦訳書はなし)

円盤の推進方法

ジム・エンツミンガー

自然現象—科学的な記述や説明が可能な科学的興味のある事実または出来事。最近この言葉が別な惑星から来た人々について弁明するのに用いられている。

最近英国のバーナード・ロゥウェルは、UFOの目撃は自然現象の結果であると述べた。

ロバート・S・マクナマラ国防長官は、現在のUFO目撃に何らかの実体が存在することを否定すると正式に発表した。長官は言う。「目撃者の諸状態や周囲の物理的環境によって光学的な幻影が生じたのである」と。これは〝自然現象〟を意味するものと思われる。

たしかに多数の人は知識がないためにこの種の説明に同調するだろう。そして一般人にとってはこうした自然現象説はきわめて都合がよいのである。円盤の機動性やスピードは地球の自動車や航空機に比較すると人間の耐久力の限界を超えているように見えるからだ。

ノースウェスタン大学の教授であり、米空軍の〝ブルーブック計画（編注＝UFOの調査機関）〟の科学顧問であるH・アレン・ハイネック博士は、ミシガン州デクスターで発生したUFO事件を調査した人であるが、次のように言明している。「UFOが行なうといわれている物事のすべてがやれるような機械など何が出来るものか」（編注＝ミシガン州で円盤目撃事件が発生したがハイネックは『沼地のガスが燃えて円盤のように見える発光現象を起こしたのだ』と一シュウしたため、米円盤研究界で大論争の的となったのは今年四月頃のこと。更にハイネックはアダムスキーの円盤写真を手にして『これはヒヨコの飼育器を撮影したものだ』と説明している場面がロサンジェルス・タイムズ紙の三月二十六日付に掲載されている）

なぜブラザーズは円盤の秘密を地球人に洩らさないのか？　この主な理由の一つがここでわかると思う。現在彼らの円盤の推進方法を地球人に洩らすのはあまりに危険なのだ。このような〝乗物〟はきわめて危険な武器になるかもしれないし、地球人はきわめて不安定な人類であるために信用できないのかもしれない。したがって惑星人は人気のない荒涼たる地域に着陸するのである。

ゆえに今は他の世界から訪問者が到着してわれわれを自滅させるような新しい道具をばらまく時期ではない。むしろ彼らの出現やその生き方によって啓発されねばならない時期である。今もし彼らが大都市に強行着陸するならば大混乱におちいるだろう。

大衆が円盤は現実の物体であることを信ずるのが困難な理由を少し検討してみよう。いわゆる円盤写真の多くが静止しているときでさえもあまり鮮明でない理由を尋ねる人がいる。その答えは次のとおりである。大抵の場合彼らの宇宙船（円盤）は地球の大気圏を通り抜けたり、船体のフォースフィールドを放射したままで地面近くに滞空する。これは飛行機が電気のアラシの中を飛ぶときに機体の表面に静電気が発生する現象と似ている。このため

に機体が光るのである。円盤写真においてしばしば船体がピンボケの状態で写るのはこのフォースフィールドによるのである。写真用フィルムには乳剤が塗布してあるが、これは各種の光に感応する。円盤は磁場を持っていて、これが多くの可視光線や不可視光線などと結合しているためにボケた写真になるのである。もし円盤がカメラとかなり接近していれば、フィルムの未撮影の部分まで変質することがある。

或る人々は尋ねる。「円盤のすさまじいスピード、驚くべき機動性、ジグザグの航路などは一体どうなのか？」その解答は次のとおりである。円盤が急速に方向転換をやるときには特定の機首を向け直す必要はない。なぜなら円盤の外周のどの部分でも思いのままに機首となってそのまま方向を変えることが可能であるからだ。急角度の方向転換においては円盤内部の磁極を変化させればよい。円盤は宇宙空間に常に存在する磁力線に乗って進行する。ときとしてジグザグに飛ぶけれどもこれは地球の表面近くで起こる。この理由は、或る場所では磁場すなわち磁力線が弱く、或る場所では強いために、円盤が自動的に強い磁力線に乗るからである。

ところでこのような飛び方をする場合、特に急激な方向転換や加速を行なう場合に、乗っている人間の肉体に何も影響はないということを或る人々はどうしても理解できないという。円盤の内部の状態は、地球の人工衛星に宇宙飛行士が乗っているときに体験するような状態とは異なるのである。円盤の内部は如何なる変化にも耐えるように正常な気圧が保たれている。そして一個の小さな惑星のように作られている。つまり惑星の重力とは全然別な円盤自体の重力場を持っているのであって、大気圏内を飛行する場合もこの飛行原理は保たれているのである。ゆえに乗船者は内部を自由に動きまわることができ、飛行中にベルトでからだを縛りつける必要はない。高速で走行する自動車の中でハエが自由に飛びまわるのと同様なのだ。これは或る人が言う〝アンティグラヴィティー（反重力）〟の状態ではなく、アダムスキーが言っている〝プログラヴィティー（重力に乗る）〟状態なのである。

ゆえに不得要領なことだが、次のように言わねばなるまい。「人が何かを結論づけるには先ず徹底的に調査研究してかかるか、それともあっさり投げ出して一切そのことに言及しないか、いずれか一方だ」

（編注＝円盤がものすごいスピードで飛行中、急激に方向転換する場合には人体が耐えられないではないかという疑問にたいして、かつてアダムスキーは次のように答えている。

「そのような場合は、円盤内のフォースフィールドが乗船者の人体中の分子までも一緒に転換する方向へ引っ張るために、乗船者は全然ショックを感じない。しかるに地球の航空機はそのような装置を持たないので、急激な方向転換や加速をすると機内の壁にたたきつけられるのである」）

金星と土星のプラザーズの人間性

—一九六六年五月一日
アダムスキー財団における
講演から最初の一部分を再録—

ロウランド・クセラ

本日私は一つの試みを行ないたいと思いますが、これはみなさん方にもできると思います。つまり金星と土星のプラザーズの人間性を私たちの〝心眼〟の前に描いてみようというわけです。そして彼らの〝意識の窓〟を私たちが見通すことができ、彼らの理解力と憐れみの息を通じて私たち自身を見ることができるほどにプラザーズの人間性の大体のパタン（型）を描いてみようと思います。このためにITSS（編注＝邦訳版〝空飛ぶ円盤同乗記〟の原名の略称）中のプラザーズに関する記述を応用します。

プラザーズの身体に関して最も驚くべき点の一つは、私たちの身体に比較して寿命が著しく長いということです。

以下は〝空飛ぶ円盤同乗記〟からの引用です。

「遊星はある周波数のもとに機能を果たしていますが、この周波数はそこに住む住民によってのみ確立されます。私たちの各遊星では周波数が高いため、生まれた子供は幼年期から成熟するまでに緩やかな発達の期間を必要としません。出生から青年期までの平均期間は、地球の十八年またはそれ以上に比較すると僅かに二年です」（同書一五〇ページ）

「地球では個人の幼年期から成熟期までの発達に長期間を必要としながら、年令と退化は早く来ますが、これは古い伝統と因襲のためです。真実の知識は、どんなに大昔にそれが得られたにしても、容易に離れるものではありませんが、たびたび繰返された人類の重荷と苦悩は数千年間記憶され、克服できないほどに人間の魂にのしかかっているのです。

ご覧のように、私たち宇宙人は老衰しません。これは充分に学んだ教訓の賜物を日常生活に持ち込むからです。、無益だと判ったものはすべて捨てるからです。常に生新さを肉体に表現するとき、このように若くなるのです」（同書一五一ページ）

以上によりますと、進化した惑星の兄弟に関しては三つのきわめて重要な面があることがわかります。

(1)彼らの寿命の長さは旧約聖書中の記述を裏付ける。そして近代の進化論を否定する。すなわちノアの大洪水以前にはこの地球の人間も一千年近くの寿命があり、その間に多くの子供を生み、病気を知らず、注ぎ込まれる知識と知恵を楽しみ、〝無限なるもの—神〟をはるかによく知覚していた。

(2)青年期を通じての彼らの非常に急速な発達、いつまでも保つ若さ、老衰しない非常に長い寿命などは、彼らが病気や苦痛を知らず、〝年を取る〟という考えなどを持たないことを示している。

(3)私たちが〝年を取りながら〟人生の三分の一を費したときには、人類に奉仕できる働きざかりの期間があと三十年しか残っていない。これを奉仕の分野ばかりでなく〝生長し拡張してゆく〟彼らの可能性について私たちのそれと比較してみれば、彼らは二十倍以上もの長い期間を有している。迷い多き怠惰な私たちの年月の記憶と影響については全く問題にならない。

「婦人たちは二十才そこそこにしか見えないが、後にファーコンが語ったところによると、彼女らの年令は三十才から二百才に及ぶとのことであった！　ゆったりとした流れるようなそれぞれのガウンは、完全に均整のとれた体をそれとなく示しているが、後になって皆が体にぴったりと合った制服に着換えたとき、その美しく優雅な体がはっきり表われた」（同書一〇七ページ）

「男たちの容貌は、皆そろって美男子ではあるが、地球人と大差はない。したがって、私は断言するが、彼らが地球人に混った場合他の遊星の人間だということは絶対に判らないだろう。三十二、三才より年上はいないように見えるが、この印象も後にファーコンから訂正された。彼の話によると、ここにいる男たちの年令は地球式の計算でいえば、四十才から数百才に及ぶそうである」（同書一〇八ページ）

「二人の体はよく均整がとれていた。一人の身長は六フィートを少し越える位、三十才そこそこのように見える。顔色は血色がよく、黒カッ色の眼には深い生の歓喜を示すような光をたたえているが、何故か異常に鋭い眼差であった。波打つ漆黒の髪は普通のスタイルに刈ってあり、服は焦茶の背広で、無帽であった」（同書二八ページ）

「したがって人間は仮の姿ではなく、〝永遠〟の具体化なのです。そしてこの真理を会得している私たちは、常に現在の中に生きています。真理そのものが永遠であるからです」（同書一六六ページ）

惑星人に関するジョージ・アダムスキーの知識はいわゆる進化論を否定しています。ただ一種類の活動しかやらない〝進化した人間〟は一方で肉体をしなびさせていますが――怠け者は心までしなびさせています――、ブラザーズは雄大な生き方をしています。彼らは意識ばかりではなく肉体にも注意を払っているのです。（以下紙面の都合により省略）

生き生きしたヤングスターたち――下町の宇宙ッ子

東京　T生

七月の六日のことなんですが、近くで遊んでいる二人の子供と一緒に、ケガをして道ばたにおっこっているツバメを助けたことから仲良くなり、私の家で三人で紙に絵を描いて少時間遊びました。そのうち私の部屋に空飛ぶ円盤とその乗員たちの絵がかかっているのを見た子供たちは思わず元気よい楽しい声で「あ！　あれ円盤だぞ！」「わァ宇宙人もいるや！」としばし目をまるくしていました。そして「君たち、宇宙人が円盤でやって来てると思う？」と聞くと「そんな気がする」とハキハキ答えたものです。「ところで君たち、テレパシーって何だか知ってる？」と聞くと、二人が二人とも「ウン、知ってるぞ！」「つまり感じるんだ」「電波だってネー」と答えたのには再び閉口。そこで「ひとつ君たちテレパシーやってみない！　こうするんだ」と提案して行なったのが次の実験です。

ハサミ、時計、エンピツ、消ゴムの四つを二人の前において、一人が思念し、他の一人は相手の方を見ないで感じたのを言いあてる。全部で五分間以内でした。

一回目（H）時計を思う　（M）時計と答える
二回目（M）消ゴムを思う　（H）消ゴムと答える
三回目（H）ハサミを思う　（M）ハサミと答える
四回目（M）エンピツを思う　（H）エンピツと答える
五回目（H）時計を思う　（M）時計と答える

全部適中。バンザイ！　H君は小一年生、M君は小二年生。しばらくみのる者。驚いたなア、モー・・・・

1. 人間二人が空から降下した？

宇宙飛行士のスタフォードとサーナンが金曜日にジェミニ九号に乗って大気圏のフチを廻っていたとき、別な惑星から来た宇宙飛行士たちがケープカナヴラルを訪問したのかもしれない。それとも三名の少年が精神錯乱を起こしたのだろうか。

二人の少年の父親で、ウィンスロウ団地に住むジェイムズ・ハーキンズによれば、子供たちは砂浜で奇妙な格好をした二人の人間を見たが、この人間たちは子供たちに出会うとあわてて円盤に乗り、波止場のむこうに着水していた不思議な船の方へ逃げ帰ったという。しかし父親は子供たちの話にたいして否定的で、何か感違いしたのではないかと言っている。

その二人の子供マイクル（六才）とジェイムズ（七才）は八才になる友達のスティーヴと一緒に午後七時半頃アパートの建物のうしろで遊んでいた。そのとき上空でロケットまたはジェット機のような物がパッと光って、建物の背後へ消えるのを見た。海中へ落ちたようだった。

三人の子供は家に入って、海岸へ行ってみようと母親をうながしたので一同は飛んで出た。父親は行かなかった。すると五分もたたぬうちにみな帰って来たが、恐怖で青くなり、ガタガタと震えていた。何を見たというのか？

みなが海岸へ行ったとき、三十ヤードむこうに二人の人間が背を向けて互いに話しながら立っているのが目についた。それはメガネのついたヘルメットをかむり、白い服を着て潜水タンクのような物を背負っていた。子供の一人が口笛を吹いたところ、二人の〝人間〟は驚いて波打際へ向かって走り出し、水上に浮かんでいた〝白い円い物〟に飛び乗った。するとそれは海岸から百ヤード沖合に停泊していた奇妙な船の方へものすごいスピードで進行した。

その船には窓（複数）があり、その内側には人々がいるのが見えた。横腹には灰色の星のマークとHU HR PS REDという文字があった。二人の妙な人間が遠ざかって行くと同時に子供たちと母親は逃げ出したが、船が上空へ飛び立つものと思ってふり返ったら、水中へ没して見えなくなった。

子供の一人スティーヴも家に走って帰って両親にこのことを話した。一方ハーキンズは二人の子供を別々に離して各自に質問したが、大体に回答は同じであった。後にスティーヴからも同じ回答を得た。

「子供たちはみな別々に同じ答え方をしますし、くわしい内容は全員一致しています」とハーキンズは言う。子供たちが話をでっちあげたのではないかという問いを彼は否定して、そんなタイプの子供たちではないと答えた。しかしハーキンズによれば、子供たちと母親が見たのは海軍の潜水隊か潜水艦の乗員の演習ではなかったかという。彼はカナヴラルの警察へ電話をかけた。一応報告すべきだと思ったからだ。だが仰々しい話はしなかった。彼は〝空飛ぶ潜水艦〟というものがあるかどうかパトリック空軍基地へ依頼したが、何の回答も得られなかった。

2. 他の惑星の人間は友好的だとヴェンチュラの

—最近のUFO情報—

米国円盤騒ぎ

ウェイトレスは語る

ヴェンチュラ市（ケァリフォルニア州）のウェイトレスが今日語ったところによると、彼女は数十機の円盤を見たことがあり、その乗員たちと語り合ったし、一度は円盤に乗ったこともあるという。

同市のウェストラモナ通りに住むこの女性はルイス・ポターという。彼女は八才のとき以来〝この世界以外の星〟から来た人たちと語り合ってきた。また二ヵ月前には（六六年の一月には）ヴェンチュラ上空を飛ぶ数千の円盤を見た。

彼女の言によれば、この大円盤群はケァ州に大変災が発生した場合にとるべき処置をテストするための演習をやっていたのだという。もし大変災が発生した場合は、地球上に住んでいる他の惑星の人々と〝少数の地球人の友〟を円盤群が救出することになるだろうとポター嬢は言った。

「大洪水、大地震、核戦争のような緊急事態が起こったときは、私は想念伝達によって〝あの人たち〟に合図をします。すると〝あの人たち〟はちゃんと私を救い上げてくれます」

惑星人が地球へ来るのは、地球が核戦争によってバランスを失い、他の惑星に影響を与えるかもしれない連鎖反応を防ぐためだと彼女はつけ加えた。「惑星人は地球人にたいして絶対にトラブルを起こさないばかりか、核爆発実験による大気の汚染を浄化さえしていますし、アラスカの大地震その他の大変災では人命を救助しました」

彼女の話によれば、このまま事態に変化が起こらねば地球は一大変災に向かっているのだという。惑星人はこのことを知っていて、すでに大量のミツバチと魚を宇宙船で運び去った。その他の生きものはたぶんあとで運ばれるだろう。

「政府が惑星人を入国させれば彼らは戦争や飢餓の諸問題を解決するのを援助してくれるのですが」惑星人が地球人に容易に接近しないのは撃たれるのを警戒するためだという。

3、六名の高校生、四個の気味悪い物体を目撃

デンヴァー地方の六名のティーンエイジャーが一九六六年四月七日にデンヴァーの南方にあるダニエルズ公園でピクニック中、空中に停止した飛ぶ物体と背の高い人間らしきものを目撃した。

ラッセル・スクリヴナー夫妻の息子でイリノイ高校の一年生アラン・スクリヴナー（十七才）の話によれば、他の二名の少年と三名の少女が七日午後五時三十分頃、リトゥルトンから約十マイル南方のダニエルズ公園へドライヴした。一同は車を停めて、一軒の古い小屋まで三百ヤードほど歩き、そこで火をたいてピクニックした。

すると午後九時三十分頃、小屋の中にいた一同は屋根の上を歩く足音のような物音を聞いた。そこでアランとドン・オーティス（十七才）は調べてみようと懐中電燈を取って外へ出たが、何も発見できなかった。外は全く静かだったが、突然ブーンという音が聞こえてきた。するとあたりで何かガサガサという音も聞こえて、ドンとアランが立ちどまればその音も立ちどまった。二人は車の停めてある方の草地を見た。すると大きな円い尾燈（複数）

をつけた、自動車のような物が見えた。

その光は動きまわっていたがやがて行ってしまった。二人が小屋へ引き返すと他の者はまだ火を燃やしていたが、みなが話すには、たった今大きな人影が明りの中を通りすぎるのを見たという。それは六フィート一インチもあるアランよりも大きかった。

『そこでぼくたちは小屋を離れることにして、車の方へ歩みよったとき、ドンが一つの光を見て叫び声をあげた。目もくらむような白く光る物があったんだ。更に二つの弱い青い光体と、足下にもっと強く光る一個の光体も見えた。四名は車の屋根の上にあがって約二十分見つめたよ。座りながらぼくが（アランが）『おい、みんなこれを見ようじゃないか』と言ったんだ。一同はフットボールのような四個の光体を見たが、それにはみなドームが付いていて、押しつぶされた球体のようだった。周囲には奇妙な音が響いていたが、それは一定の方向から聞こえてくる音ではなかったね。強弱をくり返す音だった。

三個の光体は右手にいて、そのうち二個は空中に停止し、一個は上下に浮動していた。四個目のやつは左手からやって来たが、近づいてから色が赤に変わった。一同は車で逃げ出すことにした。ぼくの車は五四年型のフォードだが、新しいエンジンを付けていて、よく走るんだ。だがエンジンはかかろうとせず、車内ラジオはウンともスンともいわない。

やっと走り出してから一同は一個の巨大な光体が道路上をあとをつけて来るのを見た。車から約三十フィート後方にいたが、右寄りに近づいて来て、そのまま飛び去ってしまった』

『奇妙なことにその光体はバックミラーに映らないんだ』とオーティスは言う。『四個の光体は空中に浮かんでいた。はっきりと識別することができたよ。直径は約二十フィートで、二個は速く動き、他の二個は上下に動いていたね。それらを見てからぼくは確信したんだ。以前は空飛ぶ円盤を信じなかったが、今度ばかりは納得したなァ。あの円盤はぼくらを傷つけようと思えばできたと思う』

他の同行者は次のとおり。マイクル・シミントン、パトリシア・レザフォード、ケイ・ハーリー、メリー・ゾラー（全員高校生）

ケイ・ハーリー嬢は言う。『小屋の外にすごく大きな人が立っていたわ。なんだかわけのわからないブーンというような音も聞こえるのよ』

レザフォード嬢の話。『ケイと私はこわくなって車の中に入っていたわ。するとヤブのむこうの左側に柔らかい青い光体が一ついたけど、次第に速くこちらへ近づいてくるの。すぐ目の前には車のヘッドライトくらいの大きさの赤い光体がいて、もうこわくて身動きできなかったわ』

シミントンはピクニック前に足を痛めたので松葉杖を使用していた。彼の話。『ドンとぼくは小屋から出て最後に車の上へはいあがった。するとブーンという奇妙な音が聞こえた。カン高い音じゃなかったね。すぐ近くで聞こえるんだ。車を廻すと青い光体が空中に浮かんでいた。ちょっと見つめたらすぐに飛び去ったよ』

別な光体は谷の内外を上下に浮動していた。アランの車にはブレーキがかけてなかったのにガタガタ揺れて容易に走ろうとはしなかった。

この少年少女たちは事件を通報するために警察へ来たとリトル

ルトン警察署長のジョン・C・マカイヴァートは言った。

「彼らはみなたいそうまじめで、女の子のうち二人は恐れおののいていた。たしかにみなは酒を飲んではいなかったし、インチキな話をでっちあげようという意図もなかった。実際何か奇怪な物を見たのだ。通報後にパトロールマンが現場へ急行したが何も発見できなかった」（ロッキー・マウンティン・ニューズ六六年四月九日付）

4. ミシガン州の円盤事件

一九六六年三月二十日にミシガン州アナーバーで少なくとも十二名の警官と四十名の住民が、一個の気味悪い〝飛ぶ物体〟が四個の姉妹物体に付き添われて夜間沼沢地に着陸するのを目撃した。これは米国の円盤研究界で大センセイシュンとなり、「沼地のガスが燃えて円盤のように見えたにすぎない」と否定説をとなえたハイネック博士と肯定論者たちとのあいだに猛烈な論争がうず巻いたのはこの春のことである。以下詳細に内容を伝えることにしよう。

〈四十名が円盤の着陸を目撃〉　UPIの伝えるところによると、その夜主物体はハネ弾のような音をたてながら離陸するまでその真上に四個の物体が扇形に空中に浮かんでいた。

二名の治安官補の言によれば、その主物体の表面には気味悪い光（複数）がまたたいていた。それは林の上に浮かび上がり、また降下した。警官たちもこの数個の物体の編隊を見た。一農夫とその息子は主物体から五百ヤード以内に接近した。そこで六台のパトカーが編隊を追跡したが、編隊は飛び去った。

ワシュテノー郡の治安官補スタンリ・マクファドゥンは、少なくとも六十名の住民が、空中にまたは地上にいるその物体を目撃したと述べている。マクファドゥンと治安官補デイヴィッド・フィッツパトリックはアナーバーから十二マイルの所にある問題の沼地で、主物体が樹林の高さにまで浮かび上がり、続いて降下して明らかに着陸したのを目撃してから沼地の中を泳ぐようにして追跡して行った。

四十名ないし五十名の住民が地上に接地している物体を確実に見ているとマクファドゥンは言う。ただし暗夜のために光しか見えなかった。

だが農夫のフランク・マナー（四十七才）と息子のロナルド（一九才）が警官に語ったところによれば、二人は沼地を突進して主物体から五百ヤード以内に接近した。そして後に物体の図を描いたが、それは柔らかそうな材料で出来ていて、表面には光（複数）がまたたき、アンテナ（複数）が出ていたと言っている。

「お父さん、あの恐ろしい物をごらんよ！」とロナルドが叫んだとき、その物体は離陸した。「そいつは木の高さまで上昇してからまた下降したんだ」とマクファドゥンが言う。「私とフィッツパトリックは見物人に警告するために後退したが、大体に四十ないし五十名の住民がながめていた。少なくとも十二名の警官もいた」

「物体には赤と緑の光がついていて、両脇に一つずつ光があり、中心には白みがかった赤い光があった。二個の深皿を合わせたような形で、頂上には球がついていて、色は茶色だった」とマナー

父子は語った。

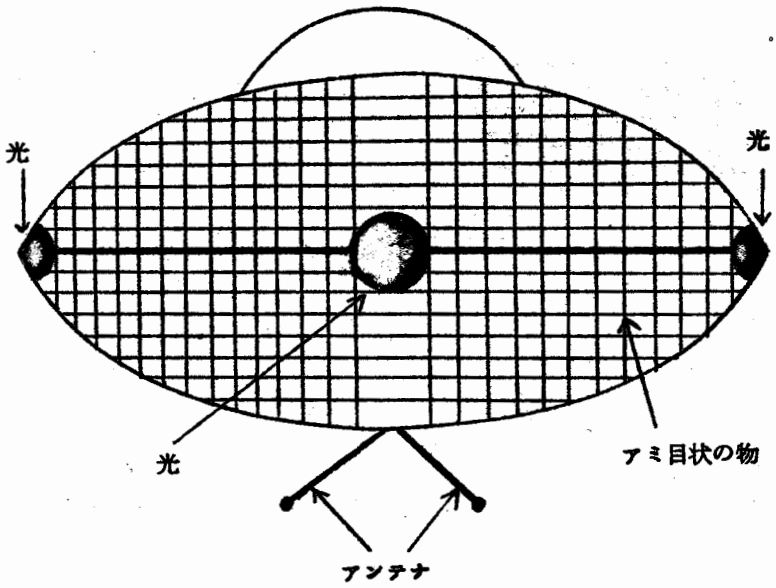
近くの小村デクスターのパトロルマン、ロバート・ハニーウェルは、彼と同僚の車が現場へ急行する途中、物体の一つが車の上をかすめ去ったと言う。

そこから約五十マイル離れたセルフリッジ空軍基地は、ニューズマンに照会するのならパナルクリークのデトロイト防空隊本部へ聞けという。しかし同本部の情報係の電話は出てこなかったし、基地司令官は留守だということだった。

警官隊がカメラを持って現場へ急行したが、到着したときには物体はすでに見えなかった。治安官事務所はハニーウェル、マナー父子、その他の人々の目撃報告を〝確証〟したと声明した。

（編注＝以上の事件について米空軍プロジェクト・ブルー・ブックの科学顧問ハイネック博士は「沼地は他の惑星の人間がおよそ来そうな場所ではない」と反発し、「沼地にたまったガスが燃えて円盤のように見えたのだ」と説明しているが、その反論の内容は如何にも科学的説明であるにしても、マナー父子が見取り図まで描いているレッキとした物体の存在の否定論としてはあまりに独断的であるように思われる）

マナー父子の描いた主物体の見取図



カポキンの円盤

—英国航空協会名誉会員—
チャールズ・ギブスミス

アイルランド、ウォーターフォード州カポキン付近で発生した円盤目撃事件と写真撮影によって、不幸にも〝空飛ぶ円盤〟として知られるようになった現象の研究に、われわれは一歩前進したといえるだろう。というのは、これは信頼すべき目撃者（複数）による目撃事件であり、しかも完ぺきな確実性を持つ写真まで添えてあって、多数の事例を見てきた筆者が徹頭徹尾保証できる第一級の目撃例であるからだ。

このUFOは私の同僚であるジャクリン・ウィングフィールド嬢とデンマーク人の娘リスベット・モルテンセン嬢が、一九六五年十二月二十六日（日曜日）の午後三時十五分から三時三十分までのあいだに目撃したものである。ウィングフィールド嬢は自分の自動車にモルテンセン嬢を乗せてドライヴしていた。天候は快晴で青空がひろがっていた。二人はUFOに気付くとただちに—それは二人の前方を横切って飛んだ—車を停めて（エンジンもとめた）、車外に出てから低空を無音でゆっくりと飛ぶ不思議な物体を見つめた。

見たところその物体は曲線の輪郭を持った細長い物体で、固体のように見え、淡い色がついていた。その後尾には噴射しているというよりもむしろ付着しているように見える、炎のような光輝を持つ〝羽毛状の物〟があったが、これは煙その他の航跡を残さなかった。

ウィングフィールド嬢はカメラを携行しなかったので、モルテンセン嬢に、車中においてあったモ嬢のカメラを取って来るようにと彼女に呼びかけた。そこでモ嬢はカメラを取り出してUFOが遠くに消える前にどうにか一枚の写真を撮ったのである。使用カメラはアグファ・クリックⅡ型で、幸いにも操作は簡単であった。さもないとセットする時間はなかったことだろう。

さてこの写真が出来てからそれを見たときモ嬢は少々とまどった。彼女の記憶ではそのUFOはもっと細長い形で、〝羽毛状の物〟はもっと短かかったからだ。形のほうはUFOが遠ざかるにつれて角度が変化することにより説明ができるだろうし、〝羽毛状の物〟については、肉眼で見たよりもカメラで写したほうが不釣合に大きく写ることがあるという原理で説明できるだろう。

当初彼女はこの未現像のフィルムを私の所へ持って来たが、数日間私たちはこれをうまく現像するのに最上の方法はないものかと考え込んだ。ネガに何か重大な物が写っているとすれば最良の結果を得なければならないからである。しかし都合のよいことに私の友人で有名な写真家のパーシー・ヘヌル氏がまもなく私の事務所へやって来た。そして彼の私有のステューディオッで直接に現像・焼付をしてやろうと気前よく申し出てくれたのである。この申し出によって、フィルムは最高の技術ばかりでなく最高の誠実さを持つ人の手にゆだねられたと私は思った。

以下はヘヌル氏の手記である。

「私はウィングフィールド嬢からアグファ・イゾパンFフィルムを受け取りました。これは私の監督指導のもとに助手の手によって好みの現像液中で正常な現像時間により処理されました。問題の一コマは休暇旅行中に撮影した一連の風景写真の中の一つでした。私は今カメラを検査したところですが、これはアグファ・クリックⅡ型で、比較的簡単な型のスナップショットカメラであり、絞りなしのF8・8レンズ、焦点は八フィートから十三フィートまでと十三フィートから無限遠までの二段階となっています。

私はネガを検査しました。そして撮影者が先を見通したとしてもこのようなネガを偽造するのは不可能だと確信しました。偽造などはできそうにもないようなこの程度の写真技術は別問題としてです。その理由は次のとおりです。(1)物体の周囲が異常に暗いこと。(2)暗部のフチに著しく荒い粒子が明瞭に見えること。特に物体の左端にそれがよく現われていますが、これは普通の写真の粒子と類似していません。引伸写真の暗部に現われて見えます。

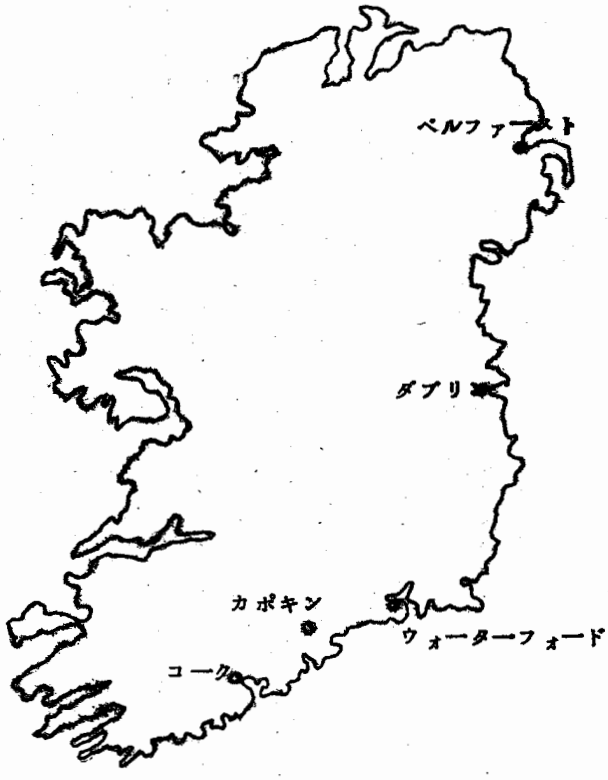
引伸機の照射時間を少しずつ増加した一連の引伸写真を硬調の印画紙で作ってみましたが、当然各印画には修正を施しませんでした。そのなかで最も薄目の印画には、前景のブレからみて、物体をファインダー内に捕えようとして撮影中にカメラブレが起こったことがはっきりと出ています。加うるにこの種のカメラでは露出が五十分の一秒以上であったとは思えませんし、むしろ二十五分の一秒あたりでしょう。現像後にステュードィオッ内で表面的にこれと類似の効果を作り出す方法を私はよく知っています。このフィルムは厳封された現像タンクで現像されたばかりでなく、現像と定着が完了するまではタンク外に出されませんでした。このネガは写真専門家ならだれが検査してもかまいませんが、ネガに事後処理は加えられていないことがわかるでしょう。

一九六六年一月十九日

パーシー・ヘヌル」

ここに掲げた写真は、異常な特徴を強調するためにできるだけ濃黒調に仕上げた引伸写真である。私はそのネガを科学・技術の各分野の多数の専門家に検査してもらっているが、或る方面でいわれてきた〝幻日現象〟であるという説にたいして意見は強固になりつつある。諸専門家の判定に関する報告文をいずれまとめるつもりであるが、これにはかなりの時日を要することをつけ加えておく。

次ページ下段がその写真。



カポキンの位置を示す
アイルランドの略図

1965年12月26日にアイルランドのウオーターフォード州カポキン付近でリスベット・モルテンセン嬢が撮影したUFO写真。左端に見える白く円い光点がUFO。白雲のように見えるのが羽毛状の物。

お知らせ

◎UDの会合場所を変更

従来行なっておりましたUD（日本GAPの別称）の月例会合は八月より会場が変更になりました。旧会場は世田谷区喜多見町の曽根有氏宅でしたが、八月より左のとおり変更します。

＊場　所　東京都世田谷区成城町五六一、中田晴久氏宅
電話（四一六）一三五〇。小田急線〝成城学園前〟下車。徒歩約十分。下の地図参照。
（注意。今年二月まで行なっていた元の会場へ逆もどりするわけですが、ただし中田氏は七月より元の家の隣家に移転されましたから、ご注意下さい。元の家を目標に行かれればすぐわかります。

＊日　時　毎月第一日曜日。午前十時から午後六時まで。
（ただし八月だけは第三日曜日に開催）

＊目　的　〝生命の科学〟の研究を主体にし、その他宇宙哲学、一般円盤問題の研究討論。

＊携行品　テキストとして〝生命の科学〟。昼食（当日メシ屋へ注文も可能）。その他研究発表を行なう人は資料持参。

◎八月に特別総会を開催！

八月は特に左のとおり特別総会を開催します。

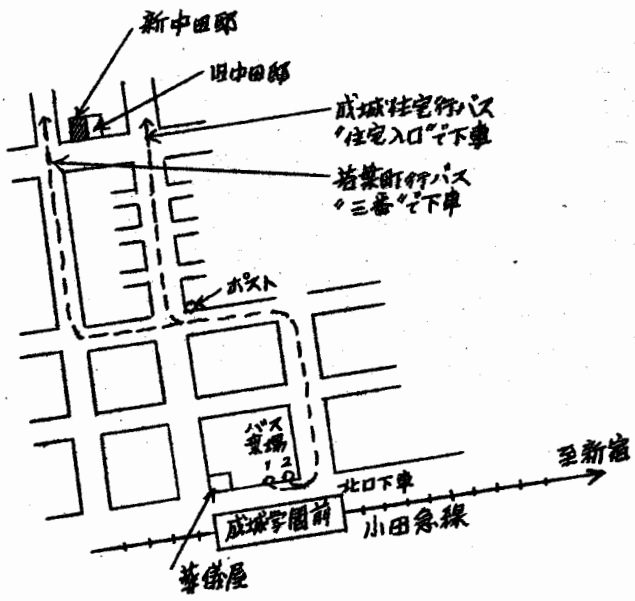
＊場　所　右会場。

＊日　時　八月二十一日（第三日曜日）。午前十時から午後六時まで。

＊目　的　日本GAP主宰者久保田八郎出席のもとに一般会合、特別話し合い、宇宙哲学の研究討議、質疑応答などを行なう。記念写真撮影。

＊携行品　〝生命の科学〟、昼食（当日外部から取り寄せることもできる）、その他研究発表を行なう人は資料持参。

中田氏宅付近略図



◎日本GAP副機関誌〝宇宙同好通信〟を発行

従来発行していた〝日本GAPニュースレター〟に加えて、今回新たに副機関誌として月刊〝宇宙同好通信〟を出すことにしました。これは〝ニュースレター〟の補足的機関誌として、主として会員相互の会話の場とするための肩のこらない交歓誌で、読者の投稿を歓迎しています。詳細は左のとおり。

＊誌　代　一部百円。送料二十五円。

＊申込先　東京都豊島区雑司ヵ谷一の三七四、太田方

安斎純夫

（注意。これは島根県益田市の久保田宛にお申込みにならないように！）

＊内　容

毎回主要連載記事―〝古代大陸ムー〟〝テレパシー講座〟〝泉声一顧〟〝磁気と電気の性質〟マンガ〝おテレの宙子〟その他興味ある記事を満載。当分の間編集責任者はニラ沢潤一郎。

（右の副機関誌についてご意見、感想、希望事項があれば遠慮なく久保田宛お寄せ下さい）

◎日本GAPニュースレターの性格変化について

〝ニュースレター〟旧号の殆どは品切れとなりましたが（ただし〝編集後記〟に記載のものだけは久保田方に在庫）、次のものが有志の手によって増刷されました。いずれも貴重な記事を満載したもので今後二度と入手できません。新しい会員の方はこの際ぜひご入手下さい。

＊昭和37年1月10日発行、第3号（旧号）増刷。

＊昭和37年2月10日発行、第4号

＊　〃　4月10日発行、第6・7号（全一冊）

＊　〃　6月10日発行、5・6月号（全一冊）

＊　〃　8月10日発行、7・8月号（全一冊）

＊誌　代　一部定価送料共百円。

＊申込先　東京都大田区調布千鳥町七八、紀陽荘内

楠元幸二

（注意。右は久保田宛にお申込みにならないように）

生命の科学

ジョージ・アダムスキー　¥300
久保田八郎訳　〒55

生来まい。し り、放れた生変さ後刷。以
〝以りさ身あをれな、一下今印部
た行あ下挺で光さありはえ。プ3
し刊庫文て筆の解、こ境ない。イ。
博て在注し絶滅理し起環そさ
をしだごとの不を消きてお下
評とまに徒一て容解わしにりん。麗5
好本、目使キし内はが生右贈せ美8
て行が早のスとの幸と発座おま
し単たは理ム書書不気がひもり
載をし方真ダのやの勇跡ぜにあ
連座まのをア理こ悩と奇。人は
に講し手涯・真。苦力きう知み
誌〝到入生ジのする活べょる込
本学殺未は一高でゆのくしめ見
に科がでれョ最のら限驚で悩の
先の文のこジ代もあ無にる。版
命注すた現つばに活すい。再

＊上　ご質は注紙100文使は用。円。
上　先　保送久

編集後記

◎長らくお待たせして申し訳ありません。四月以来個人的な事情のために本誌発行が遅れてしまい、心からお詫びいたします。各国からの貴重な情報が山積していますが、そのなかのホンの一部分しか載せ得ないのが残念です。

◎目下米国のアダムスキー財団ではロウランド・クセラ氏がアリス・K・ウェルズの片腕として活躍しています。一方デンマーク、ベルギー、英国あたりも強力に運動を展開しており、結局ジョージ・アダムスキーの名は不滅となるでしょう。

◎科学界でもアダムスキーの体験は次第に裏付けされる方向に動いています。たとえば去る六月上旬に打ち上げられたサーヴェイヤー一号が月面で撮影した写真によって、月表面に希薄な大気が存在することが確証される段階に至っていますし、また米国ジェット推進研究所サーヴェイヤー担当者レオナルド・ジャフェ博士は、月の表面を『固さや地相は地球の砂質地に似ている』と述べていますが、これはアダムスキーが〝空飛ぶ円盤同乗記〟中で説明した月の地相を裏書きします。更にソ連が打ち上げた自動ステイシュン金星三号が三月一日に金星に到達した結果、金星の表面温度はかつて伝えられたような数百度の高温ではなく、もっとはるかに低温であることも確認されました。ジャーナリズムを通してのこうした発表を盲信するのは危険ですが、きわめて緩慢ながらも大衆は次第に大気圏外へ目を向けるようになり、他の惑星群に人間が存在することを意識し始めるようになるでしょう。そしていつか地球人は宇宙船で宇宙を航行するようになり、進化した他の惑星の人類の生き方に驚異の目をみはるときがくると信じますが、そこに至る重要な要素は科学技術の発達であって、その科学を正しく伸ばすには哲学を必要とするわけで、したがって科学と哲学は不可分の関係にあります。この文明期における科学の究極の目標は、人間を宇宙空間へ送り出して、理想的かつ華麗な生活を営む他の惑星に到達し、進化した人類の思想や科学を直視して驚嘆し「なんとわれわれは井の中のカワズであったことか！」と大いに恥じて赤くなっている地球人に自己反省を行なわしめ、進化への限りない意欲を燃えたたせることにあるのであって、問題はそれだけのことなのですが、ここで比較対照の法則が重要となってきます。これこそものの優劣を知り、向上するための道標となるからです。たとえば合理化された快適な生活を送ろうとして大半の日本人は欧米の生活様式に憧れますが、これは決して西洋かぶれと侮蔑すべきことではありません。より良き生活様式が存在することをだれもが知っているがゆえに、それに近づこうとするのであって、これは前進でこそあれ退化ではないはずです。大体人間にとってすばらしく合理化された理想的な生活法のパターンが宇宙に存在するのであって、その下にあっては微小な地球の東洋も西洋もなく、思想上からも東西の区別などありはしません。ゆえに現在のもろもろの分裂状態を統合し平均化して〝生活を楽しむ自由〟を人間に享受せしめるのは科学技術であることは明白です。その科学技術発展の土台として哲学が根を張っている必要がありますので、UFO研究にも哲学は不可欠です。単に目撃報告の分析や推理だけで終始しているのは味気ないことです。私たちは〝推理クラブ〟の域を脱して、先ず哲学する人間の集団を形成しようではありませんか。

◎山梨県の高校生、山本佳人君からの報告によれば、去る五月二十八、九日にわたって同君の学校で開かれた学校祭で、同君主宰の円盤研究クラブは日本GAPの資料を展示して大成功を収めたということでした。特にテレパシー、宇宙哲学の解説に多数の生徒が深い関心を示したそうです。若い人、特に少年や幼児が意外に宇宙的な物事に関心を持つのに驚かされます。実はアダムスキーの〝空飛ぶ円盤同乗記〟からヒントを得たと思われる宇宙もの

マンガやドラマが国内にハン濫していることも原因の一つですが（なんとアダムスキーは大きな影響を与えたことか！）、それからみても、テレビ等のマスコミの機関のあり方が問題視されるにしても、その果たした役割は絶大なもので、ここにも科学の勝利があります。

◎別掲〝お知らせ〟でお伝えしましたように、八月には編者出席のもとに特別総会を開催することになりました。猛暑の折から難儀とは思いますが、ふるってご出席下さい。遠隔透視力を持たぬ私たちは文通だけでは相手のイメージを描くことさえできません。フィジクル・コンタクト（対面）によってこそ未知の人を知り、何かを学ぶことができます。

◎副機関誌〝宇宙同好通信〟を出すことになりました。これは都内在住の有志の献身的な奉仕によって作られるもので、ガリ版ながらも内容はきわめてユニークです。ぜひお読み下さい。

◎これまで本誌に掲載したアダムスキーの論説を一本にまとめて単行本として都内の出版社から出すべく目下編集中です。刊行は来年になるでしょう。アリス・K・ウェルズによるアダムスキーの伝記も出次第に翻訳してお目にかけますからご期待下さい。

◎ロウランド・クセラ氏編集になる〝円盤写真スライド〟と記録映画も入手すべくクセラ氏に照会中です。入手したならば映写会を開催します。

◎人間にとって重要なのは知識よりも意識の問題です。これについては〝生命の科学〟をお読みになればよくわかると思います。まだ在庫多数ありますから未入手の方はぜひご購読下さい。

◎本誌のバックナンバー（旧号）は次のものが編者方に在庫しています。（注意。これは31ページに掲載した〝バックナンバーの増刷本〟とは別ものですから混同されないように。ご注文は久保田へ）一九六三年九・十月号（送料共一三五円）、一九六五年五・六月号、同年七・八月号、同年第30号、一九六六年第31号（以上各送料共一六五円）の計五点。

◎ご承知のように七月から郵便料金が値上げとなり、本誌送料は一部三十五円になりました。したがって本号から誌代百三十円、送料三十五円、計百六十五円となります。すでに会費払込みの分はそのように計算し直しますからご了承下さい。

◎これまで東洋でアダムスキーの支持活動をやっていたのは〝日本GAP〟だけでしたが、セイロンの住人ハリ・ペレイラという電気技術者（五十一才）がグループを形成したいというので助言を求めてきました。立派な英文を書く人で、七月から八月上旬まで東京に滞在していたのですが、遠方のため会えなくて残念な思いをしました。

◎欧米における円盤研究の盛んなこと、そして円盤問題にたいするジャーナリズムの理解ある態度！　これからみれば日本ははるかに後進国です。一体日本人は何を考えて暮らしているのだろうと怪しみたくなるこの頃です。一国の国民の民度を計るには円盤問題を持ち出すとはっきりしてくるようです。

◎当方資金難で活動が停滞気味です。如何ほどでも結構ですから寄金を歓迎します。（久）

日本GAPニューズレター　1966　第三二号

翻訳編集発行人　久保田八郎

発行所　日本GAP（別称・UD）

島根県益田市益田古川
振替・松江　二六三〇
（久保田八郎個人名義）

昭和41年
8月10日発行
不定期刊

第32号

頒価一三〇円・送料三五円